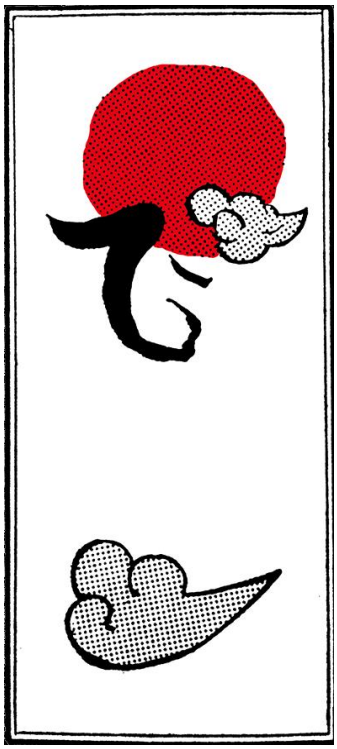

第９號
月　１　回　發　行
ひの心を繼ぐ會
〒791-0510
住所:愛媛縣西條市
丹原町丹原 50-1

領　　綱

一　私達は明徳を明らかにします
一　私達は國家の鎮護となります
一　私達は大和世界を建設します

神道（三）　（大和世界の建設）

竹葉　秀雄

古事記　はじめに　（三）

ただ純粋にし　―直日もちて―

天之御中主神、その光顯の天照大御神をはじめ、八百萬の神々は日本のみの神々ではない。萬教は一に歸する筈である。私が今まで「明徳を明らかにす」を書いてきたのも、儒教に佛教に物理にと一應そのものを探ねて、それらが皆、神道を、それぞれの事・處・位に應じて發現し、述べ説かれてゐるものであることを明らかにせんがためであつた。この爲の筆はまだ足らないし、いつまで書いても限り無い人生宇宙萬般のことである。すべては神の顯現で、神に歸一してゐるもの、今まで私が書いてきたものは皆この事を明らかにせんがためのものであることを知つていただゐてゐる筈である。これから筆をかへて、神道、古事記について書くにつけても、儒教、佛教、物理、數學のことが當然出てくることと思ふが、それは、それらの諸教諸學から古事記を觀、神道を説くのではなくして、卜部眞一大人の言の如く、古事記の事實眞實の上に立つて、他の諸教諸學を觀、宗家と分家、根幹と枝葉、宇宙國家人生の相を述べんとするのである。また、それは、決して、始めから、日本神道こそ唯一のものとして固陋に他を顧みないものでなく、如何なる教、學問を學び研究しても、その奥の奥を探ねゆくとき、この世界に入らざるを得ず、いつか入つてゐることに氣づくのである。どこに立ち、どこにあるもよい。ただ一條に、純粋に純粋に、求め求め、探ね探ねてゆくことである。如何なる水の一滴も、山の落葉の下くぐる細谷川も、やがては大海に注ぎ、大空にいたる。歸すべきところに歸し、絶對境に入つて、再び發現の諸相にいたる。この神道を説き明かさんとするのである。

（以下次號）

第一章　農の哲學的考察

～第三節　農本生活　第二項　本末關係～

菅原　兵治

行と藏

次には行藏の辨に關する問題である。孔子が顔回に「之を用ふれば則ち行き（行ひ）、之を舍つれば則ち藏す。唯我と汝とこれ有るか」といつて行藏の辨の難いことを歎じてゐる。社會的に用ゐられて或る位を得て、其處に出て行つて自己の所信を行ふのを「行」といひ、之に對して出づれば出で得るだけの力を十分に有しながらも、舍てらるれば（世間から用ゐられなければ）周章てず騒がず、其の力を深く藏して安處してゐるのが則ち「藏」である。例へば孔明諸葛亮が南陽の草廬の中に膝を抱いて天下三分の計を練りつゝありし臥龍先生時代は藏であり、之に對して劉備の恩顧に感じて出廬し、萬世の名宰相として政策に軍略に思ふ存分其の力を發揮したのは行である。要言すれば、有位、有名の生活が「行」であり、無位無名の生活が「藏」なのである。

然らばこの行藏の辨――如何なる時に出で、如何なる時に藏するかといふ辨別が何故に左程に難いのか。思ふに生きてゐる人間は其の生命力伸長の自然のはたらきから、陽發の作用が勝ち、從つて之に深き道義的內證の修養が伴はなければ、ともすれば外面的なる功名位錄の追求（行）に走り、若し之を得られなければ、不平不滿怨恨懊惱、遂に「藏」に安立出來なくなり勝ちなものである。出ようと、藏れようと、其の人の實力其のものには本質的變化增減は無い筈のものである。――恰も十圓の金は、之を財布の中に藏して置くも、人の前に見せびらかして歩くも、其の十圓の金額其のものには增減が無いと同樣に然るべきものであるのに、人間の世俗的なる慾念は、有位有名の「行」をのみ之を望んで、光を韜（つつ）み香を晦（かく）して無位無名の「藏」に安立することが出來難く、遂に生命の弱喪を來すに至るものであるが、殊に農道生活に於ては最も然りとする。由來、農道生活は深く山澤の間に在つて、人間よりも物言はぬ自然を相手にすることの多い生活である。それが或は名聲の廣告的宣傳に苦心する商店經營者の樣になつたり、或は浮薄にも役人や政治家の眞似をして官位勳等の肩書を欲しがるやうにのみなつて來たのでは、決して農道的生活に安立出來るものではない。然も近來の農民の動向を見るに、この傾向が意外にも多い。實力以上の肩書を得ようとして、其の獲得運動に狂奔し、其の爲に身を誤り家を亡ぼすに至る農民は決して少くはない。世間的には模範村と謂はれつゝも、其の村長が村民よりは餘りよく謂はれず、模範村は三年と續かぬなどいはれるのも、其の實多くは賣名的行爲の結果なのである。勿論農民なるが故に社會的顯要の地位に出ては――卽ち「行」してはならぬなどいふのではない。否、常に大いに深く藏する者なればこそ、いざ出づべき時來らば大いに出で得るのである。一鄕一國の爲出づべき場合には堂堂一切を捨てゝも、敢然として出づべきことを否定するものでは毛頭無い。ただ農道生活に生くる限り、其の根本的態度としては、行よりも藏に立つべきであるといふのである。

無位無官の「藏」の道に立つといふと一見甚だ寂寥なるものゝ如く思はれるであらう。然しそれは有位有名の立場に在る人と同一標準を以て比較せんとするからである。無位に生くる者は無位の中に高き誇りと豐かなる歡びとを持たねばならぬ。淸初の詩人、隨園先生袁枚の詩に、

衣冠を著けざること　半年に近し
水雲深き處　花を抱いて眠る
平生自ら想ふ　無官の樂しみ
第一人に驕る　六月の天

といふのがあるが、無官には矢張り無官獨自の別天地があり、無官獨自の樂しみがあることを發見せねばならぬ。

余に問ふ　何の意ありてか碧山に栖むと
笑つて答へず　心自ら閑なり
桃花流水　杳然として去れば
別に天地あり　人間に非ず

といふ有名な李白の山中問答の詩などを微吟しつゝ、春の夕べ獨り鄕村の森を歩む時など、無位無官の田園人には矢張り田園人としての天地があることが思はれてうれしい。然かも現代人にはこの境地が容易に解し得られないのである。これに就いては現代の學問修養の內容を深省する必要があると思ふ。卽ち現代多くの人々は、學問修養とは世間的に立身出世して利碌を得る方便位に考へてゐる者が多い。然し吾々が順調に「行」の道を辿り得ることならば、何も格別深く學問や修養に苦心せぬでもよいではないか。有德有力の材を抱いて猶社會的に出でず、深く「藏」する時に、餘程の深いたしなみが出來てゐないと其の境に落着いて居れない。孔子も「人知らずして慍らず、亦君子ならずや」と言うてゐるが、學問修養の一半の努力は實に此處に存せねばならぬのである。殊に自然を相手に悠々耕耘して山澤の間に農道にいそしむ者に於てをや。此の點農道教學上、乃至は農村指導上大いに反省の要ありと思ふ。とまれ吾々は山澤布衣の生活に深い悟りと歡びとを有たねばならぬ。かういふ點より私はよく老農の口から聞く、

「百姓といふものは呑氣なものでさあ。お天道樣と一緒にかうして働いてゐると、幾等年をとつて我がまゝ言つても轉任も免職もありませんからね。」

といふ言葉に無限の味ひを覺えるものである。

古人の金言を靜思す③

～人知らずして慍らず。亦君子ならずや。～

三浦　夏南

子曰、學而時習之、不亦說乎。
有朋自遠方來、不亦樂乎。
人不知而不慍。不亦君子乎。（學而第一第一章）

子曰く、學びて時に之を習ふ、亦說ばしからずや。
朋有り遠方より來る、亦樂しからずや。
人知らずして慍らず。亦君子ならずや。

慍は怒りを含む意であると集註にあり、絅齋先生講義には「何といふことなくて氣象のすぐれぬ所がある。含は言はずして自然にさういふなりにみえることを言ふ。」とある。人に理解されずして怒らぬとは、單に外面的に怒りを見せないだけでなく、內面的にも怒りを生じないといふ意味である。學問もここまで來れば君子ではないかと聖人孔子は最後に言はれる。

人間は逆境に置かれた時にその眞價が問はれる。學問を深めることを悅び、遠方より來る同志に樂しみを發する學徒であつても、人に認められずして怒りを內に含まないことは難しいことである。しかもここで理解されず、認められないのは、聖人の學であり、求道の努力である。この世で最も尊く、正しいと信ずることが理解されないのは悲しい。また聖人の學を講ずる者、その志すところは一身一家のことではなく、天下國家の一大事である。崩れ行く祖國を前にして、認められずして退くはあまりにも悔しい。それほどの情熱を持ちながら、逆境に際して動ずることなきはまさに君子者である。

集註には「學は己に在り、知ると知らざるとは人に在り、何の慍ることか之れ有らん」とある。全てを自己の責任とする大勇猛心。ここまで廣大な心を持ちたいものである。人は得てして正しきを知り、大義を行ふと思へば、思ふほど、上手く行かぬ世の中を憤り、障壁となる他人を恨むものである。しかし、自らが信ずる正義が眞に正しく、それを行ずることに本當に安んずることが出來るならば、世間や他人は關係ないはずである。また、その行ひが道に適ひ、德に通ずるならば、必ず人を動かし、世を變えて行くはずである。其を信じられぬからこそ、怒りが生ずるのであり、それは取りも直さず學の不足を示してゐる。人の不知を憤るより先に、己の學の不徹底を嘆き憤らなければならない。

孔子は怒るなと言はれてゐるのではなく、怒らないのは君子ではないかと言はれてゐる。自然に怒ることなき、君子の泰然自若たる姿を贊嘆されてゐるのである。ここまでに至らなければ、君子とは言へないのである。內に怨みの心を持ちながら、外に怒りを見せぬ僞君子とならぬやうに、常に自分の心の內に確かめて行きたいと思ふ。

集註を著された朱子も逆境の時にあつて學に勵まれた先哲である。宋が夷狄に蹂躙されようとしてゐる危急の時にあつて、我が身を思ひ祖國を顧みぬ政府の高官、狡猾なる侵略者に切齒扼腕せざるを得ない時勢である。その渦中にあつて「學は己に在り」と確固として斷言された朱子の高潔さを思ひたい。この覺悟は逆境の中で實際に戰ひ續ける中で體驗として心中に摑まれたものである。孔子の言葉を單なる名言として受け取るのではなく、見かけ上の平安の中を退嬰へと進み行く現代に於て己の內に確認して行きたいと思ふ。

機關紙でもお傳へした通り、『土居清良』の感想を掲載して參ります。

土居清良を拜讀して

明野　洋吉

知識の乏しい小生としては歴史にも詳しくはありませんが、激動の戰國時代に土佐の長宗我部氏、キリシタン大名としての九州の大友氏、中國地方の大物毛利氏、全國制霸を果した纖田・羽柴・德川の各氏、又武田・上杉・伊達氏等の斷片的な事は知つてをりましたが、『土居清良』を讀むまで（恥づかしいことですが）四國の地元に知・勇を兼ね備へた戰國の名將の居ました事を全く知りませんでした。又この書を讀むまで九州の大友氏が宇和海を渡つて四國にせまつた事や土居公の率ゐる四國勢が中國地方まで出陣し、纖田軍（羽柴秀吉の率ゐる）と對峙（毛利勢として）本能寺の變を知つた羽柴秀吉の大返しと呼ばれる行動に土居公も關わつてゐた事などは始めて知る事でした。（數年前岡山の友人田村氏と纖田軍（羽柴秀吉）が水攻めを行つた備中高松城跡邊りを訪ね歩いて當時の土堤跡などを見まはつたりした事を思ひ出します）いづれにしましても土居公の楠氏ゆかりの金剛山麓の千早上から高野山詣で熊野權現・伊勢參宮等その行動半徑の廣さにも驚きです。更に四十才代にして自らの進退を決めて野に下り故郷の地で（當時としても長壽と思はれる）八十四才の天壽を全うするといふその生涯に驚きを禁じ得ません。恥かしくも全く知りませんでしたところの南豫の歴史の一端に觸れ、戰國の英傑の一人を知つたことは幸せです。

この書を一讀して何かが解るとも思へず再讀、三讀してみたいものと思つて居ります。

とよくも農園だより

三浦　杏奈

今月號より三浦家が營む「とよくも農園」の様子を少しばかりページをお借りして掲載していきたいと思ひます。かねてより月報の中でも、菅原兵治先生のご著書を中心に、歸農の意義や農を中心とした一族復興について學んできました。その理想を現實に表さうとする私たちの農園の取り組みをここで紹介させて頂けたらと思ひます。

「とよくも農園」といふ名前は古事記の冒頭にその御名を拜することのできる「豐雲野神」に由來します。自然豐かな里山の中で湧き立つ雲を仰ぎながら、少しづつ廣がつて行く畑。そんな生命力ある農園をイメージしました。最初は二反から始まつた畑もその「とよくも」の名の如く徐々に廣がり、今では一町近くの畑を耕作することが出來るやうになりました。

そんなとよくも農園ですが、農業を實際に營む契機となつたのは、まだ寒さの殘る今年の二月下旬。西條市安用で自然農をされてゐた「まんがら農園」の野滿さんとの出會いにありました。野滿さんを農の師として週一回の研修が三月から始まり、「習うより慣れろ」といふ野滿さんのご指南の下、隣の部落で畑をお借りし、私たちの農業生活の幕が開けました。――あれから約十カ月。がむしゃらに走り拔けた一年でありました。最初は自然農にこだはり、機械を使わず、肥料は米ぬかだけで育ててゐました。私たちの辭書には「トラクター」といふ文字がなく、一日六～八時間、默々とスコップで畝立てをしてゐました。生の肥料は發酵に時間がかかり、發芽した最初の段階で蟲に襲はれ、收量があがらず、生産が安定しない日々。山から水を引くために苦

勞して配置したホースは臺風で一瞬にして流され、一つ一つ心こめて植ゑたジャガイモは、猿の餌に。人智で考へて行動しても、その上を行く自然の力に壓倒され、上手くいかず心配事が増えるばかり。しかし改めて、天地自然の神々に仕へ、神々と共に生きるといふ點に喜びを見出し、安んずるといふことがいかに大切か身に沁みました。

農業の信仰的意義についてはこの一年で自然農を通して體感しながら自分なりに學び、考へながら農業に行じてきました。しかし、今後は農業の經濟的な面についても考へる必要性を感じてゐます。神様に仕へ、その賜物として戴いた恵みを通して「業（なりはひ）」として成り立つ農業でなければ農の信仰的・宗教的方面にのみ偏つてしまひます。今後は、土地や人に對する敬意をもつて無農薬にはこだはり、その上で多收量・高品質も見込める有機栽培に取り組まうと考へてゐます。

今年も殘り僅かとなりました。畑には、新年を今か今かと待ちわびて頭を出す人參や大根と、冬の寒さに耐へんとどつしり腰を据ゑた白菜が頼もしく植わつてゐます。勤皇村建設、一族復興といふ大理想を抱き、最初の一歩を踏み出した「とよくも農園」。次號からはより詳しく畑の様子やエピソードをお傳へできたらと思ひます。

★活動報告

・十二月四日（火）勉强會『農士道』を開催。
・十二月十一日（火）勉强會『大學』を開催。
・十二月十六日（日）第四十三回醒庵忌

★今後の豫定（よてい）

・一月二十二日（火）十九時～二十一時　『農士道』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

・一月二十九日（火）十九時～二十一時　『大學』
松山市男女共同參畫推進センター☆コムズ三階會議室一―二
（住所：愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇）

★一燈照隅（いっとうしょうぐう）　**萬燈照國**（ばんとうしょうこく）

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周圍（しゅうい）の人々の心に「ひ」を燈（とも）し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

年會費

・一般會員　三千圓
・賛助會員　一萬圓
・特別賛助會員　三萬圓
・支援會員　一萬圓